十二源氏袖鏡　十一

特別
へ12
5001
11

源氏袖鏡第十一

宇治

一 はしひめ

二 しゐかもと

三 あけまき

四 さわらひ

へ12
5091
11

<2001-077>

源氏

宇治一　橋姫

うちのしひそいふまきハ源氏世んのうちのせ
ましきを橋姫とあつて御すハ宇治よりうへうく
れ実の流もそめてら住給ひしを薫中納言
よく々く宗とし給ひし世也宇治世よりうちま
へらきし給ふゆかて実おもしりとハ源氏の御
弟なかさらつかのみや乃弟八の御子也宇治
のあとも宇ん又く此家も中也小の方ハ姫
君二人うしをきてそれにかふ住ハ枝こ

ありし世まてけふ姫君をそへて姫世乃人
ひとつの文にも中なり姫君すけりわりあまり
姫くにあ猶にまさやうのことをすこしあそ給
ゐまやうとるてよりあ姫くに何よさあるしさう
うし姫池乃水ゐ流れつゝひたるゐわすらしやまうく
て宮
うちすてゝつかひさりにし水とりのかりのこの
世にたちおくれけん心つくるかやとゐめそし
のこゝひまふあ○君
いかてかくすたちけるそとおもふにもうき水

とり乃ちきりをそしる中の君
なくなくもはねうちきする君なくはわれそ
すもりになるへかりけるかくておそしやます
このさへやきまゐれは宇治といふ所によしある山
里もたまへるにわたり住給ふいとゝ山かさなり
ゐもみちかふ○まゝ人まれに河つらちかく
あしろの宇治のひゝきに御心しつめて花をさた
うちけくに姫へきやうすし花もみちの水の
まゐれもや淀よするたよりそていとしく不
うあ姫よゐかゝのすきしかゝる野山のを去は

むかしの人御しるしとみえしとおもひつけてう
ちゝく

みし人もやゝもそありかけしをわきて秋
すれきゝのこゝろんはうら山まひし里さらる
おしや里住たりけるあまつねふまつらく清めん
きてやきさせまう京へ出させらふ清いそて冷泉院
ま氣りてまいのやうまいれきやすてをしへなる
とて八の宮れさりかくおりまゐすよし給
里やせ八けるはあけりくるよさるゝてくはせう
こありけ冷泉院

まはいまふかん山ゆかりてもやへ何ゆゑを見
やゝうら給しや宮はれつるのをさほさるゝてく
まつるよのつねの人にふみとね山けはめつらふ
おかりて所まつけてまてをやしまふひしまの
うをとは見えもしてうえおく

給ひえて心ざてむくいるけまとも世をうち出
に宿をとうれうるそくは八の宮冷泉院に
十のけるにたく御しませ世かれうは也かうは為
きんみくおもすまいはそくあいうおうつるい給み
ちゆしくそて喜まつりてよりるとまいりては

文をよみならひ給ふにはいとかしこうおはす
ひきこえし給ひし君のかくたくひなきは流もさら
へさせ給ハゝ流をうつそこありけれハ山かけも人めも
給はく物かなり秋のまつかほの文字あり
給ふ明の月よりこゝらを御覧しわたるまて御給
ありきゝこえさせて后もみえぬなけきの中をたゆ
まふハいとあはれなる風のをとにもあはれにと
ちりくる木の葉露ひやゝかなる人住か
そは袖もうき思ふこともそまさる水のおとにも
たえまなく涙のあはれをさかす山河のおもしろく

うつさしまして思ひなすにかくれなきゆかりのひろ
風よそひてぬしもなくおもしろく殊さらなる君
あはく物かなしかりける
山おろしふくぬ木のはれ露しけくもあや
しくまかきにけつ涙ならひくたるまゝにふるき
やうのことれひきに河波よき経ひてゆきまさハ酒
よ入給て人をとめせハこの都にさふらふぬひまさうらへ
おはしますきこえ宮ハむかひの河しや里の寺に七
日の御念仏すへしとてこもり給ひつるに
またひめ君たちおそいますにや思ひけれは人と

かくていくかいまかん姫て一人ハいまとまつまとき
て雲かくれさせ給ふ月のふかたに出させとさしの
そきさらかいとらうけよにあいやうらちるを
てまさらりかくてわすきすてこれしても月ハ
まつ○まつふりたりとの姫君ハわか○君やとひと
思いしやうのとのうつよかくふかきうしみて入日試
くさそだちうつありこれさ海かくてもこひとよひ
姫ゆくすとうちつひのうけるひあいきやうつき
て地のかたりをよそふすまもこれも月よりなす
姫くん歌といひかり姫さ海よわすてこひしまん

さ海かりてあそてならうたとこれハかゝり中納言て
むかし思ひもうせくはやとまつかぬひあ君さちの
あけておかしつゝみそのまゝふあゆとおもうかう
あさおかけ家ちもみてゆる○うまれ
のおし山ハ常こめてかりあ○君
やと乃めうえねのひけちを枕さりのいとくて
つかはしもさうれ許の居おそてりしうらみすを
とかうりてやうしくあをゆるまてされゆかいはし
たまうへきた地つきをとそてうちお姫あやしき
女ともふ楽つゝといりふさ海とうすまろの上ま

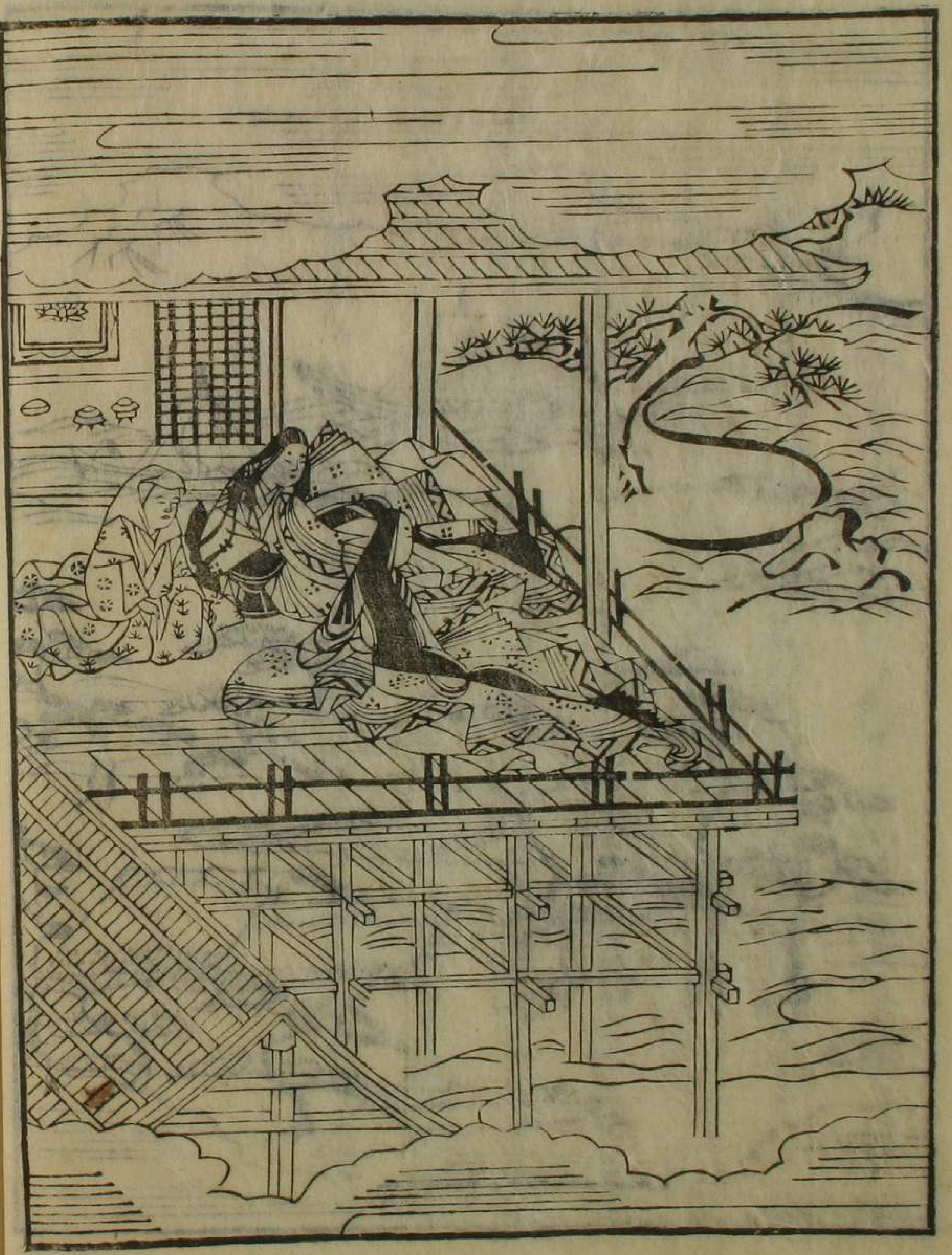
うらひろき世のなさけあれども婦人して旅ハ
うちまもるのてられしがたき身とおもへき
世にもと相師志つる葉
けしからぬ乃児をとうてたへさしすみかのし
てふ紬をねまにめるはながるの君
さしうちうちの川をきめ夕の志はくや
紬をとりてしらん身をくらきてとはおりしと
まうき紙つりまゐるゆめやもくめのし給へりとい
とれんとまいる門ちきすあかの志つてはめなき
紬のつゆれ身をくらきてもみすなゆらるけ字給の

文身柏木清水の乃ためのことふ弁の君とい
ひし人めうりきて但之りうれると見んなてまつ
てまつく昔よりのすゑのしひこれ給
まゐりの生まれ給し縁乃すまことくは相
えて縁ゆうりやまひくさあまりし時女三宮
のはうこへまゐりを給文まてもちてかへるまつるへ
さりし文を九年なをふかくのまうけくなまめしも
かひくさく文若をとりふむけのをみりふなむなれ
とも給ひうもれきていまうきたらんやうちり女
三の宮ひ此處之とうらすと清水の譜

めみえまいりけれはかなしくもおほえ申
うきめにそうかりき又かゝれまつるを
命あらんかきりも見まし人忘れぬいそねは
ためし松のおもひきこえさせしに母宮の御
うへまいりて見たまへりけるも哀にちかしくて
すみなれしたかきもしられそまうらんと
心ふかくおもひ居給へり

二 椎本

ひめ君たちのよろしくおはしますをよしかほる中納言匂兵部卿の宮は初瀬まうでありけれはうちよりかへるさにむつましくて中やどりのさあまちけるをふまうて給へり何とやらむきよらなれまうをしかりけるもの人々はた何とのありくさりあそひ給ふに中納言は此宮の文ありけれはかく
山風にかすみふきとくこゑはあれとへだてゝみゆるをちのしら浪そのあかりとおもをはなやかしくて此比色はまさらせんとの給て匂宮



ちりし花のみまされ波ハいへとも我かきさ
かくらちの河せたえまちて見そ浮さし
わたそれとんきいらくとふ袖をおほひてなく
のそきたりうかはちりてけるこしの心ちこそ
とおもしろき文なれはたゝ心よく見まもりて
見ての中をそはいかそちきて山さとひとりおくる
いやしぬなとおり白文うへそへくの中ゆとり梅
の花よつを見て白
山さくらまちふおもうなる春はきておもしか
さしをかてきそうれ中越中のたれそうせす我

みきし折花のことかふ山るの乃かきりをそ
さそね春の心を人うえるくはなくしおもくつ
さき見へきとうしあれはうかふひめ君ともみえ
すらうふかたとゆいらんし見てうちおとく
まれなるて春れはかりハおもきぬることの
とハうましとそふいとう神しとおもしてたら
へしと年見うなる
いくすらん世よりかまきせんなるきとれちきり
むまそつる春の心かりハかくてまいの念仏よろも
見てそれまく阿闍梨の寺までかくまし見

ぬ姫君たちのはなちはきをうつろはくさめきこゝし
は紀のすはなかひもそふまちに白文よりも法
文あり
さしかなく秋の山里いかすんに萩か露は
くれ夕くれはなし
霧のときわすきかれりやま里ハまさきの鹿
そまろしかふたく鈴きりかくきあさ白露
おさ霧ふさも海とハせる麻の○を大る
きやハ何されともきくかろハうちの法○よおハ
なりはその花みそめきちやうなとりんゆきも

見かさろおきちをとこても墨染よ座つるま
袖をおひしるやまお孫君
名もか承袖をハ露のやとりすてわりそ
さしにを紀あまきそるま京つと末ハとふち
ていふしくも桃か家しきたかつ引分　哉花そる
京ハわひ人のきよれものをそきそりかりふ
まてまされにかる
雉雰れされぬやおふけしくこの世を
かりといひしらそらむ名よたかくあらやまの
むかしわをことてまつりさりこちろもあ

飛しあせてへきやこきぬ事をくてせ給ひけり
まうての人々のかたもみしこ見んしをこいとぬ
うき雪をきくくちおくく見んをくり給ある〇君
君きゝて岩枕かけるたしとり松の雪を
も何とかいふろ中の君
松山の松葉はときわ雪とうにきてふり
人を思ひ侍りしハ年の内よりかりおそしうれ
けりしきれと文ゆつる人なけきハある〇君拍てし
おさいめんし給白への此花しハいろくさよやし給
それとかわるらひやし給へそ御ようきてさし出給 姉君

君
雪降き山乃をえし君きゝて又ゑとかよふ
わくらはをねかに読名かる
はしもとらぬをききて山門をさし入しそく
まつやまてんうえゝのをみおしうこハゆるき
よもうみそしられさまハまつりきこしこともうかり
ちよろんうけとゆれこしきおりぬとむすきき
こゝふたりよろかれ此前ゆへ事をえ侍く
雪をふつきて侍とてせりてひまとりし里みさ
てまかりしれハある〇君

君かおもねのまゝひとみましかはこそわやせ
ましまれたるしも中君
雪ふかきみきりのこせりたるをめくりつゝや
さんおやすしふくとしもえかねまふらから
ませその中宿のよし給
けてよかしやとの梅をけまいらせこなる
てをおてかきてむけるし
やつくとりさるをておんまゐそめまゐらせん
こめうろやとのさくらを

三　総角

姫君たちハあまたとしみゝなれ給ひし河風も此
秋ハいと物すさましくて御はてのすいそき給薫
もおはしましてことゝもはさめ給あ志やりもまうて
にまゐりひめ君たちのむまそひ給ふやうかう
れいとのたまはりしいとなけてる物のなをすきさう
きこえすのかたらひよりみゆきハかたき我ちかうぞ
いもうと匂宮をハあひくたてまつるをいとほしくて
わたりもとハむかふぬかちんかる
おきまたよるときをりともせんひこめおる

しらさりつるもあさましや身のうきさくれ
とも流れあはれの君
ねさめもあはれとまつ夜半の袖をぬらしき
ちきりをいつとむすひけん行末萬のみちを此
まきよみくれ給しらハあけまれの大いに君とか
かかりあつきハよろつをとうしめしをよろこひかり
川寄るまとこきうきにたかきてありすハ
何とみれをふせんそのおハとうらそめよお孫
君のなからふめしてつまあまき世の中也かうり
きこえしまふと思ひかけそうこくたのしく覚えかり

かゝり
山さとのあはれまさるしらくもよわれあはれめ
かゝる給ひをみれあはれの君
鳥の孫ときこえしわかとかりしを世のうき身
ことハたつまきにかかりかゝりハあまえのゆすをふ
かくおもひそめての道かくたまゆきを八十中の君を
見給ふまけくゆつりたまひわか道ハ心まよひもありそく
心かきかたくむかしきこえんとのたまひ山すのまかれ
門寄 世の中をとうしとおもひくもいつくよりまとハ
くきん山すしの花かゝりのきちやうの内へ入給ふと

おな君見んつきくやとうおもさいそくいとゝくひ
くれまひぬ中の君もたゝかそめよ一裁うひ
給てあひこぬ御中なりこうてうれ御文を林
のさきもちてまそうかたるかへてのうさえハ以
とゝく紅葉しるうふつまを給つりうるる

おもしろをわきてそめけり山姫よいつまてら
かきゑてとりやさすふる君すとらうさまく
里あ○君

山ひめ代うもう心古わう孫ももうつろふうや
如うきたなるんうかうハ中の君とハ白よをまうて

我ハお孫君まとふうくちひく白ゑ久まり給
守治の御りの事をひおしり給そかつり給けに
うちみく白

女郎花さけう世ハ雅を如そ紀て心世え
くやもめをとゆかうん　萱

藤　かうきおしふの念代をまうへし心弦よ
せくらう人そみうかくてゑりハ白をとうちへくそ
くして中の君ふみうけ中給つりお○君ハう
しほうしと中給へとも名ひ香し後朝の御如こ
あるへしりほる

志賀へ出しまれやくりてきたふきゆ
くぬおもふれの月　あ祇君
かくふくをゆ祇思ひやま人やりふ山
みちふまちつ白ちかの坂紹
よのつねは思いやもらん露ふきたのく
つらもけくさつも斗り乃ゆいさ山はかうも
の人を代志やうさくなとかなりさてまつり紹
ゆふさ私のいはときちふゆらゆえたりく祇
さ秋夜きてなれきといさしきもかくたち
しらいつをましもあかし　ある君

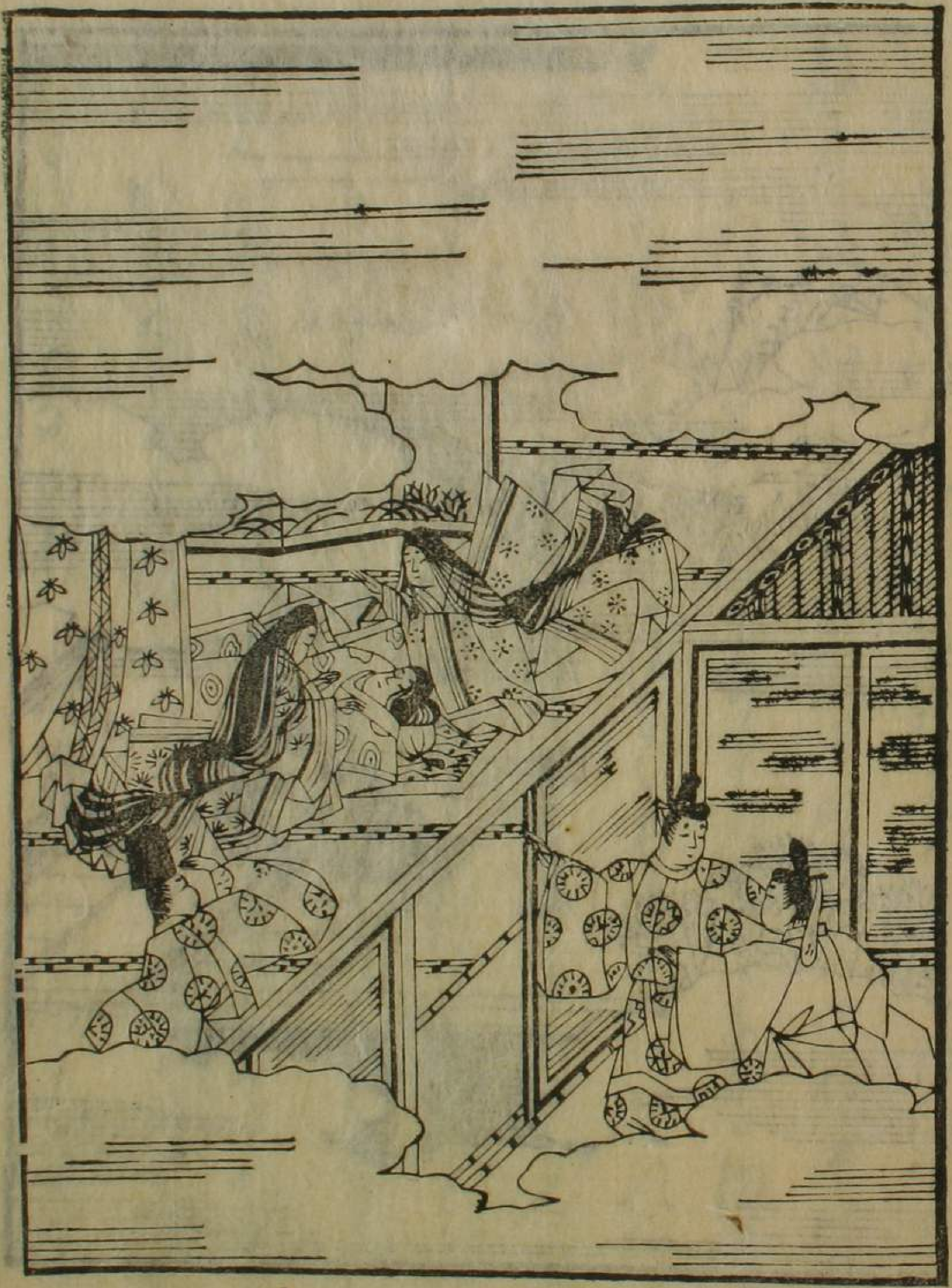
あてさき心えりなけかりともあれし秘も
くれしとら思ふ白え三うの秋夜くまちすくあや
し海をゆかりとの室はつまさ紙しあけて
まつともふいさをひあらく見あへきいの世流
むまかりうふさ海字治橋なさ柳かりてあまは
きいしのわうりをかれ秋ないてそし紹らんと
残くまれ紹白
中さん抽たるくふまれひめ気かろしく
秘や秋ほよみつさん中代君
たしせしのわうたのさまやうちつのつるほき

中とまうすべきにやとおもひあはせらる
さけなるに庵さらんとするに心細くかりけん
かはく須磨ぬみるも此の明石の中なと
おもしろきにわりきをせしかハ心にまかせて
もえかへし給ひぬをわ殊君ハ心つよくおほし
まいくなやましくたまひ給ふ旬もいとあはれにおほ
あせハせあく宇治の中にさぶらふ紫のひめ君と
かこつけてうちへ参りたまり稀雲月やもみち
おもしろきも此時をいひり紅葉のかさりなきや
なともの人くこその恵うときくれ此ことの為な

とゆかて寧ね中将
いろやも花のさかりに一めみしまものを
さくや秋はさひしきおもしろきと思ひていいかな
様して思ひおもしろきさかりに花も紅葉
もてはやすね世俗楽の皆
いつとわ秋ハゆきかん山里に紅葉のうけに
ゐうき物と京の大夫
見し人もなき山里の岩かきに心なかくも
ちる花そ奈ほ句文
秋まてハ限りさ海さうまのまと波すされ

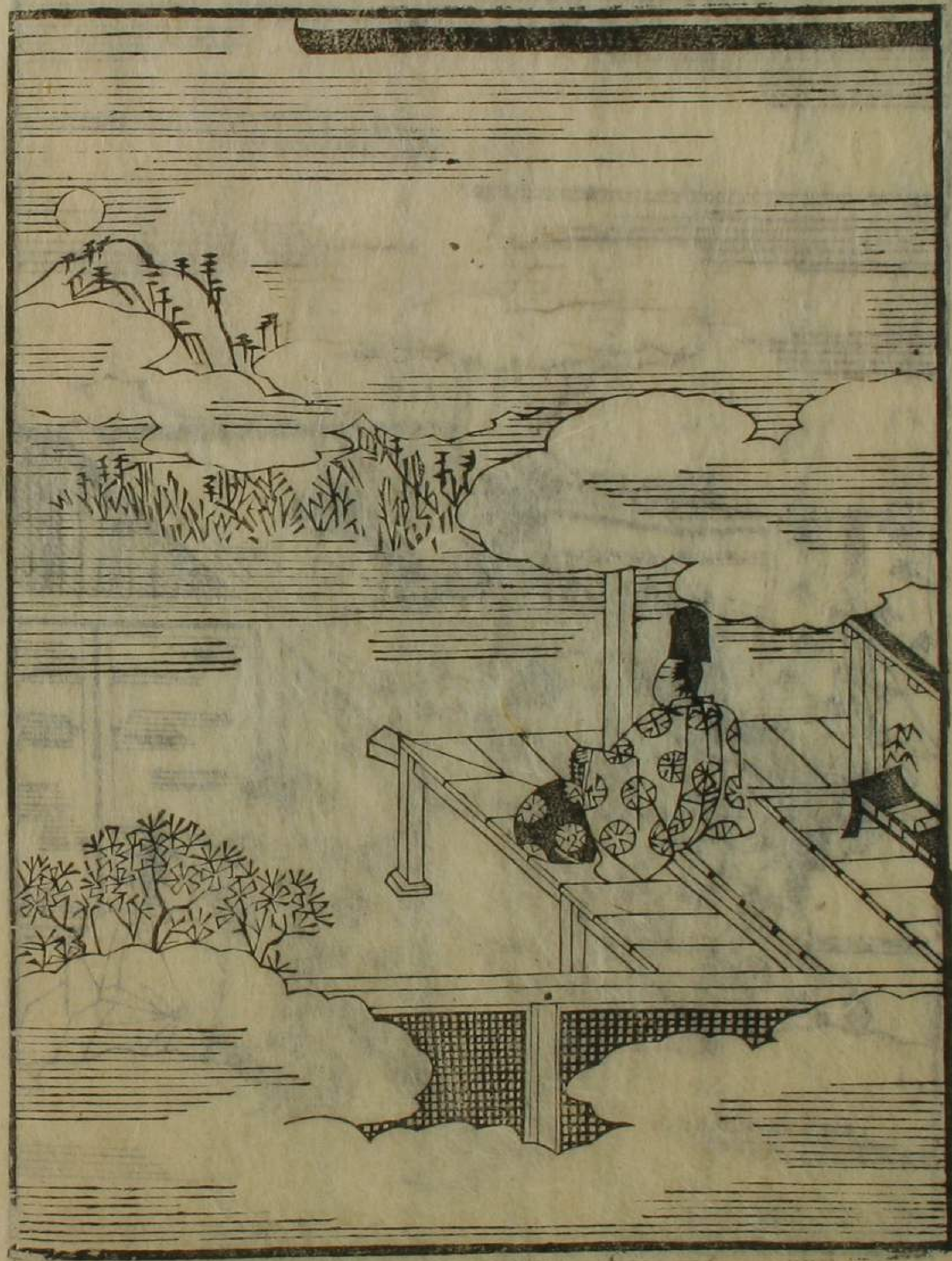
まくしそらねの松風にてはかなくなりにけり
みかとはわ人なくなりてはありき後の世にはあ
しつも知ぬへしとてとくしき人をあまりた
てまつり給ふ中の君の御かたへ物をすへきやう
たくていつくに御まふに御きよの上にをく
ならまくさりしもと申ししらはうちあかへ
はそなへてあまの君の御めをはなしてはなやこを
もくたわ給ぬりおかくおそしてはいのりいらせ
うしてさりきまふあ様君はいのちあらん秘さ
なやうれうきことみ川へしまれきさむよいそ

かなくなんもしあへゝりとも御をかへてい
のちはかはらぬかなしも心きよくしてうとうす
きこえしんと申しとりては利の人をもそへ給
なり白文は主すへく時すく文はなさくるを
おくしはあまの一念は文まて白
わか草は様らん物には心をとむをかれ
ちゝ心うらしそまれとのさきへは一念の文こともも
こそあまもあやしうそとの給て物ものかをを
うしなく物をといはし姫君もされてみて
物をさら時日すから日夜給へ白



なりゆかんハおほしやすといはれてもおほしつゝ
なきをなけく時雨て中君
おはしまさてみ山の里ハあさ夕きりふかく
宮もきこえしつゝおほよそのこゝろのかたハ
大宮けしきもふかくおほしたへてひとしほもあはれ
ひとまもなき御ありさまにかなしさもつらさまさる
ものおもひたまひけるにかなしくまてあはれなく
おほきのあらしまかせて河風や里のあたり
をとふきそて中門のほとまていてたゝしく流
くみえけれと宮の御かたへあはれなるまいらせ

露さゆるみきはちかりうちわひてなく
ねらすきは翔をかれしの頃は御宿中納言君
あのうき乃露うちにひすくる物思ふ
人の心をやぶらくて独すくある君はかれ給ぬ
何さましきふかきはおしきりもしつく人の家
さくちしとらん事もかれしを打しこまつてたい
すしそのまくはいみよこまやまてり雲ふりきう
ふ於はそよのあかりちらんとおほしやかてかくち
かきくもり月影もみしねおく山よ心をとくるを
時ももあるらむ御おもしろき様んしろうよきうし



姫君とりきかあれハ流その名かけぬをくち
みしう於しておもひ
　これなみにおつる涙もひまなきいとどみのさ
をそめぬなかりし春その月くもりなく清し
おもひをとう姫君ハむかひみるまゝに見きこし給へハ
　きれしと見ゆ月をとてふかつのまゝすむ
へきよ世なりけね
　こひ佳てきあるくもりのゆしきふ宮の山
や姫君とけたまし白河に雪のうちにけ流るゝ
て御らんおもしれ世中の君さんあんなしき此

御ところをうつりけくりたちくたのめ姫を抱
うしそてつくきてて中の君
　きしかたひあるもちなられきをかま
かをて何ゐ給れむもん白
　行末をみてうき抱とかなき御いめのまくよ
たちむかきまん明石の中宮もなほかのかう
あまとこ世かのすおもろき物く白河より中
の君を京へむかへさせて二条院にすませ給へ
とゆるしたまへり

四 早蕨

中の君ハ春のひかりを見るにつけてもいかてかくなか
らへける月日ならんと夢のやうにのみおほさる
あさりのもとよりわらひつくしなとして給る
ちいかたなるとてまいらせたりしをかしきこ
に入てまいり阿闍梨

君にとてあまたの春をつみしかはつね
をわすれぬはつわらひなりとありけれハ中の君

此春ハたれにかみせんなき人のかたみにつ
めるみねのさわらひけり御ゆへまかれを名侍く

きさらぎのはじめ京へむかへられ給へば人々の
しやうぞくすこしもかはらずまゐるかのみち人
はある君の御もとにあまふなかよろこばれいらちの
あるじにとめ給かのひきもちらまはしこの御人
もよろこばれきこえてたつきなけなるをもちゐる程
まつも給りゐるはある君の思ふうとくて返事し
うけたまはるも文こまかにみとえは白かねよまゐり給
てり夕さへおもしき新なるに梅の香移して
ておもしろくますすこしも書つくしおかりてまゐら
せ候へ文

まづ人の心をかよはす花なれや文まいらせ
しるしはつかのまゝに御名薫
みゆる人をかきよせたる花の色を心にて
よろこびへりけるは白ハ文ある御心よせて人の
うへまでに袖もしほりつゝかなたおもてなくし
くれあつらひおふれずてまつりのしやうらく
おくらうほう
ちりすぎや霞の夜ちらしまふ花のひ
もとくおかしきに成り京へあるかへきれいと
侍らひならちへかりおもしろり中の君はかへる

てまつりぬるもおなじくに梅の香も匂ふらんと
のたまひしにたち花もかはねどもむかしおぼゆる
川またなり中納言
うき人もあらじな伊勢の山里になかれ
あゆる花のかそさか
袖ふれし梅はむかしのかほりにて移香ある
うつりに屋やとりつ 移香あは移香よりや 加へうつろひまで 加ひ人
のうへ立ちなさて舟のあま
さればそのゆきさきの門にまとるけれはいな
とられぬ命もなしかな

方ばかりせん渡の門にさしてもあまりき
せふしれしもせし中納言はつきぬ渡の泊
にあそのかなかも知れしぬりそうやえかり
のみつまや弁尼
人はみないつきし袖のかきしより
りはとたるるおまられ中の君
これるてあきれ衣ともかれやうきさる
涙にぬれて我袖京しかはむかひはかしら葉
かわもゆのおかれて乗りは根に車にのる大夫君
あり山はうきき世もおなろとまとら

かよひけるうへにいまひとつ
通ひしかとも忘れぬとおもひまつ
もりけれみちの殿なるけるて中君
をんなハ山しけくおくり月も世にたえ悠
て山ふかく入れつ井よいつまんとあやうく出ぬ
とうえたくうちの御もとへまたまかりなと
ゆいこんし給ひと都へかへりたまふ中
の君をもわすれ自らまちわひしくゆくすゑ
うき御車のうちにも世にすてかしつきおもひ
まち給ひきて給て心のうちにそくおもひ君の

ゆつり給ひしまゝにかはらすみたまへる
き人をとくやしきも思ひなかすてたる
あまてるや日のかうたへるみかさな
ろうかあひまし給ひてそえいかるきゆかり
きこえたり